MGU Chapel Letter

—第 52 号　2025 年 8 月 8 日—　　発行：大学宗教センター

＊2025 年度　年間聖句＊

「あなたの御言葉は、わたしの道の光
わたしの歩みを照らす灯（ともしび)。」

詩編 119 編　105 節

前期の大学礼拝は７月２５日で終わりました。

後期の礼拝は、９月 22 日（月）から始まります。1 月 14 日（水）まで合計 35 回の予定です。ぜひご出席下さい。

✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤✤

夏の間、2つのことに気をつけよう！

✤　異例の猛暑です 。熱中症にならないために、水分をこまめに取りましょう。十分な睡眠時間を確保し、朝食をしっかりとることも予防になります。

✤　街頭で「外国の文化を体験しない？」などと言って勧誘する宗教団体があるとの報告が届いています。見知らぬ人に声をかけられても、安易に連絡先を教えたり同行しないようご注意下さい。

✚ 松島の海で ✚

今月 15 日で、太平洋戦争の終結から 80 年になります。80 年と言えば遠い昔のことに思えますが、戦争の爪痕は、私たちの近くにも様々な形で残っています。東松島の宮戸島に残る特攻艇「震洋」の基地跡も、その 1 つです。

「震洋」はベニヤ張りの 2 人乗りモーターボートで、爆薬を積んで敵艦船に体当たりするために造られた自爆兵器です。終戦までに約 6100 隻が製造され、フィリピンや沖縄での戦闘に投入されました。宮戸島にこの特攻隊の秘密基地が置かれたのは、1945 年 7 月後半のことです。島の海岸には、ボートを格納した壕、船体を移動する際に使われた電動ウィンチやレールなどが今でも残されています。

「震洋」の隊員たちには、1 か月の訓練期間が課されていました。この島に送られた部隊は、配備が遅かったために出撃することなく終戦を迎えたようですが、松島の静かな海辺で、青年たちがひたすら自爆するための練習を重ねていたと考えると、実にやりきれない思いになります。

現在の日本は平和に見えますが、果たして私たちの社会は本当に平和な状態にあるのでしょうか。戦艦大和の生存者であり、後にキリスト教徒となった作家の吉田満（1923 年～1979 年）は、「平和の時代とは、平和に向っての掛け声ではなく、一歩一歩の平和への努力が、国民の総意において進められている状態をいうのです」「戦争反対と叫ぶだけなら、だれでもします。問題は、われわれの身辺に、小さな、しかし確かな平和の実りをもたらすために、今どれだけのはたらきをしてるか、です」と記しています。私たちは、そのように行動しながら生きているでしょうか。

日本でも、貧困や差別などによって多くの人々が苦しんでいます。そうした中で、もし私たちが「自分を守るだけで精いっぱいで、他の人のことを考える余裕なんて無い」と思うのなら、私たちの社会はもうすでに平和から遠く離れた状態にあると言えます。このまま進んで行けば、自分を守ることすらできなくなるでしょう。

「平和を実現する人々は、幸いである」（マタイによる福音書 5 章 9 節）とイエスは語りました。平和は偉い指導者が与えてくれるものではなく、神の愛を知った 1 人ひとりの人間が作り上げて行くものなのだと教えるこの言葉は、私たちが常に心にとめておくべき真実です。「われわれの身辺に、小さな、しかし確かな平和の実りをもたらす」ために自分に何ができるか、具体的に考えて実行して行きましょう。　　（栗）